

論文

## 筑波山および周辺地域の観光資源・イベントに対する 大学生の関心度と体験・参加実態

—長期アンケート調査の分析—

The Degree of Interest and the Current State of the Experience and Participation of University Students  
in Tourism Resources and Events at Mount Tsukuba and its Surrounding Area:  
Analysis of a Long-term Questionnaire Survey

平沢 照雄 (Teruo HIRASAWA)

筑波大学人文社会系 教授

本論文は、筆者が大学生（筑波大学、茨城県立医療大学、放送大学）を対象として、2008～2017年にわたり実施してきたアンケート調査にもとづき、筑波山とその周辺地域に存在する観光スポットや行事・イベントに対する大学生の関心度および体験・参加実態について明らかにすることを課題とする。具体的には、（1）筑波山への登山経験と今後の関心度に加えて、（2）筑波山周辺に存在する11ヶ所の観光スポットに関する訪問経験と関心度、（3）同地域で開催される10のイベントへの見学・参加経験と関心度について検討する。その際、学生を、①筑波大学2年生以上、②新入生（筑波大学、茨城県立医療大学）、③筑波大学留学生、④放送大学生のグループに分類して、その実態を考察した。なお、2013年には一般市民を対象とした市民講座においてもアンケート調査を実施している。本論文では、その結果をもとに、上記（1）～（3）に関して一般市民との比較も行いつつ大学生の特徴を明らかにしている。

The main purpose of this paper is to examine the degree of interest and the current state of the experience and participation of university students in tourism resources and events at Mount Tsukuba and its surrounding area based on a questionnaire survey that we carried out of university students (University of Tsukuba, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences, and The Open University of Japan) from 2008 to 2017. Specifically, we clarified (1) the experience and degree of future interest in climbing Mount Tsukuba, (2) visit experience and degree of interest in 11 tourist spots around Mount Tsukuba, and (3) participation experience and degree of interest in 10 events held in this area. In these analyses, we classified university students into the following four groups: ① second-year or higher university students from University of Tsukuba, ② first-year undergraduate students from University of Tsukuba and Ibaraki Prefectural University of Health Sciences, ③ University of Tsukuba international students, and ④ The Open University of Japan students. In addition, we considered their actual conditions. Furthermore, we carried out the questionnaire survey at a civic lecture for citizens in 2013. Based on the results, we also examine the differences between university students and citizens concerning the above three objectives.

キーワード：観光資源 筑波山 筑波研究学園都市 筑波大学 茨城県立医療大学 放送大学

**Keywords:** Tourism Resources, Mount Tsukuba, Tsukuba Science City, University of Tsukuba, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences, The Open University of Japan

## はじめに

筑波山および周辺地域の経済は、1970年制定の筑波研究学園都市建設法にもとづく研究学園都市の建設を契機として、歴史的な大変化をとげてきた。すなわち、もともと第1次産業が産業の中心を占めていたこの地域は、70年代後半以降、日本最初の「サイエンスパーク」として開発が急速に進み、今日では研究・教育機関が多数立地する全国的にも有数の研究拠点へと変貌するに至った。そしてその過程で研究・教育機関への就学・就業者が増大し、多くの学生や研究者およびその家族が、「新住民」あるいは「新々住民」としてこの地域に居住あるいは近隣より通勤・通学するに至っている。

そうした研究学園都市としての側面とともに、この地域には筑波山をはじめとして茨城県内有数の観光資源が存在し、高い集客力を有する点も特徴の1つである。実際、茨城県における観光客数を主要地域別にみた場合、つくば市を訪れる観光客は、大洗町と水戸市に次いで第3位にある<sup>1</sup>。またこの地域では、16~18万人の観光客が訪れる「筑波山梅まつり」や、それをはるかにうまわる40万人規模の集客力をもつ「まつりつくば」をはじめとして様々な行事が開催されている<sup>2</sup>。

以上のように筑波山周辺地域は、全国有数の研究・教育拠点であるとともに、高い集客力をもった観光スポットをかかえる地域として注目することができる。さらにこの特徴は産業構造の面でも明らかである。すなわち同地域の産業部門別就業者の推移をみた場合、先にも指摘したように1970年代中頃は第1次産業が約4割に達し、産業の中心を占めていた。ところが80年代以降になるとその構造が大きく転換し、1990年には第1次産業が約1割に落ち込み、2010年には3%の水準にまで激減した。一方これとは対照的に、この時期に顕著な増加を示したのが第3次産業であった。それはすでに1980年時点で5割を超え、1990年代後半以降は約7割に達している（つくば市2016、48頁）。

つまり第3次産業を中心とした地域経済発展の結果、サービス経済化が短期間に急速に進展したものとみることができる<sup>3</sup>。まさに近年の筑波山および周辺地域にとって、研究・教育関連事業や観光関連産業をはじめとしたサービス業は地域発展の中心的な起動力となってきたのであり、今後の同地域の活性化および持続的な発展を実現するうえでも必要不可欠な産業部門ということができる。

ところで地域経済論の先行研究においては、こうした第3次産業を起点とした地域経済の活性化あるいは持続的な発展を考える場合、橘川（2005）および橘川（2009）に代表されるように<sup>4</sup>、「地域への外部需要（＝観光客等の地域外からの訪問者）の呼び込み」の重要性が指摘されてきた<sup>5</sup>。例えば人口4万人の釜石市の事例では、「既存の内需に依存する形で釜石市の第三次産業活性化を図ることに限界があるのであり、活性化の第一歩は、外需の喚起によって踏み出されることを銘記すべきである」とされている（橘川2009、256頁）。

こうした視点は筑波山周辺地域の活性化を考える際にも重要であり、上述の観光スポットや行事・イベントは、「地域の外から客（需要）を呼び込む」うえで重要な資源とみることができよう。しかしその一方で、釜石の事例とは異なり、筑波山周辺地域の場合は、つくば市22万人、土浦市14万人の居住人口を地域内に擁している点にも着目する必要がある。

特に平沢（2015）が指摘するように、日本有数の研究学園都市を有するこの地域の場合、「地域のなか」で活躍する多くの大学・大学院生、海外留学生や研究者の存在に改めて着目することが重要といえよう。すなわち、彼らは自身の専門分野を学ぶあるいは研究する者であると同時に、筑波山および周辺地域に「憩い」を求めるサービス需要者としての側面を潜在的にもっており、彼らの関心を地域の観

<sup>1</sup> 市町村別年間入込客数（延べ人数）による順位（茨城県商工労働観光部観光局観光物産課2017、18-19頁）。

<sup>2</sup> 茨城県内のイベント別入込客数に関しては、同上、参考資料（24頁）による。

<sup>3</sup> 以上、つくば市の人口および産業構造の変化に関して詳しくは、平沢（2015）114-120頁を参照されたい。

<sup>4</sup> 前者は滋賀県長浜市を、後者は岩手県釜石市を、それぞれ事例とした実証研究である。

<sup>5</sup> なお地域経済研究において、「地域への外部需要の呼び込み」に関しては、第3次産業との関連でのみ議論されてきたわけではない。研究史的には、伊丹（1998）、高岡（1998）、中小企業庁（2014）などに代表されるように、むしろ第2次産業の生産拠点＝産業集積地と同地域の外部に存在する需要＝マーケットとをいかにリンケージさせることで外部需要を呼び込むかに関する研究が先行して行われてきた。

光スポットや行事・イベントに向けさせ、「客として呼び込む」ことも地域活性化にとって重要な意味をもつと考えられるからである<sup>6</sup>。

そうした視点にたった場合、大学生、大学院生や海外留学生が、筑波山および周辺地域の観光資源やイベント・行事を実際どのくらい体験し利用しているのか。あるいは今後体験・利用したいと考えているのか否かについて、その実態を把握することも地域研究のうえで必要な取り組みの1つといえる。しかしながら、管見の限りでは、大学生を主要対象とし、長期的かつ多角的に行われた調査にもとづいて筑波山および周辺地域の観光資源やイベントに対する大学生の関心度と体験・参加実態を検討した先行研究は存在しないのが現状である。

そこで本論文では、筑波山およびその周辺地域研究の一環として、筆者が2008～2017年にわたり大学生（筑波大学、茨城県立医療大学、放送大学等）を対象として実施してきた独自のアンケート調査にもとづき、筑波山とともにその周辺地域に存在する観光スポットや行事・イベントに対する大学生の関心度および実際の体験・参加実態について明らかにすることを課題とする<sup>7</sup>。

以上の課題にアプローチするため、本論文では、まず1節で分析の素材であるアンケート調査の概要を説明したうえで、2～3節では大学生の筑波山登山の実態と関心度について検討する。さらにその検討結果を踏まえ、4節では筑波山周辺地域に存在する観光スポットの利用実態と関心度について、5節ではつくば市で開催される行事・イベントに対する参加経験と関心度に関して、それぞれ分析することにした。

## 1. 調査の概要

表1は、本論文で取り上げるアンケート調査の概要を示したものである。同調査は、筑波大学地域連携共同研究プロジェクト「筑波山ルネッサンス」が開始された2007年に試験的に実施した後、2008年から筑波大学、茨城県立医療大学の学部（筑波大学の場合は学群・学類）学生を対象として、2017年まで実施してきた。その過程で、2013年に茨城県生涯学習センターが開講した市民講座「筑波山から学ぶ」、2014年以降は放送大学足立学習センター開講の面接授業「現代日本経済の歴史と構造」、さらに2016年以降は筑波大学大学院人文社会科学部国際日本研究専攻の開講科目「グローバル経済と日本」受講生の協力を得て、同様の調査を実施した。

その場合、表1の授業科目のなかで、「日本経済論」および「地域経済論」は、筑波大学社会学類2年生以上を主な対象としている。これに対して「筑波山に学ぶ」は、上記共同プロジェクトの研究成果をもとに、全学の学生を対象として2008年に開始された専門基礎科目「筑波山ルネッサンス—地域社会と大学」の後継科目であり、「日本経済論」や「地域経済論」とは異なった所属学生の実態把握が可能ではないかと考えた<sup>8</sup>。

また、表中の総合科目「経済学への誘い」、「フレッシュマン・セミナー」、茨城県立医療大学「経済学」は、新入生を主要対象として開設されたものである。このうち「フレッシュマン・セミナー」（以下、フレセミと略す場合もある）は筑波大学社会学類の新入生向けであるのに対して、総合科目は全学向けの科目である。これに茨城県立医療大学の新生向け科目を加え、3つの異なる対象において実態の把握を試みた。

さらに以上の2つの学生タイプとは異なる動向を検討する目的から、受講学生の年齢が相対的に高い

<sup>6</sup> 筑波山周辺地域の大学・大学院生、海外留学生や研究者の存在に関して、詳しくは平沢（2015）134-137頁を参照されたい。

<sup>7</sup> 本論文では、筑波山および周辺地域の観光資源として、筑波山に関連した観光資源を取り上げ分析するが、この他に研究学園都市に存在するサイエンス施設も一定の集客力を持っている。これらの施設に関する大学生の関心度および実際の体験・利用実態については、機会を改めて検討する予定である。

<sup>8</sup> 実際、2012年に調査した「筑波山に学ぶ」では、全受講生24名中、国際総合学類生が17名と圧倒的であったが、社会学類生は1名も受講していなかった。さらに同2014年調査では、全66名のうち国際総合学類生は23名（35%）にとどまり、比較文化（7名）、生物資源（9名）、応用理工（6名）、知識情報・図書館（5名）をはじめとして、人文および理工関係の学生が幅広く履修するに至っている。

表1 調査概要

主要対象	調査対象科目・年次	2008	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
学部 2～4 年生	日本経済論 回答数	2008.4.15 36	2010.4.13 39		2012.4.17 36		2014.4.22 39		2016.5.9 28	
	地域経済論 回答数					2013.4.16 29		2015.6.8 47		2017.5.15 23
	筑波山に学ぶ 回答数	2008.5.28 29	2010.6.9 25		2012.6.13 24		2014.5.14 66			2017.6.14 63
	総合科目 回答数				2012.2.13 113		2014.10.20 79			
学部 1年生	フレッシュマン・セミナー 回答数		2010.4.21 44	2011.4.27 41			2014.4.16 43			2017.5.24 20
	茨城県立医療大学 回答数	2008.4.24 87	2010.4.15 35		2012.4.12 72		2014.4.24 22		2016.5.11 37	2017.4.20 49
	大学院(留学生) 回答数								2016.5.26 29	2017.4.27 32
その他	放送大学 回答数						2014.12.6 34	2015.12.5 36	2016.12.3 33	
	市民講座 回答数					2013.7.5 65				

(注) (1)各科目の上段:調査実施年月日、下段:回答総数(人)

(2)回答数は有効回答数

放送大学および茨城県南部地域在住の一般市民を主要対象にした市民講座の実態を調査した。加えて、以上8科目の受講生のほとんどが日本人学生であることから、それとは異なる留学生の動向を把握する目的から、多くの留学生が受講する筑波大学大学院科目「グローバル経済と日本」での調査を試みた<sup>9</sup>。

以上のように、本論文で分析対象とする調査は、筆者が担当した授業・講座を履修する学生を対象としたものである。そのため、例えば隔年開講の授業等に関しては毎年のデータを取ることができないこと、各授業の履修生(=調査数)にはバラツキがあること、受講生が文科系の学生に偏っている可能性があることといった調査特有の制約と限界がある。とはいえ、本調査は、長期にわたり多様な学生を調査対象とすることで、①新入生、2年生以上の学部生、大学院留学生、②筑波大学と他大学、③大学生と一般市民とを比較しつつ、筑波山および周辺地域に対する大学生の関心度と体験・参加実態の一端を明らかにすることができる点に独自性を有しているといえよう。

なお、上記アンケートに関して、本論文で取り上げる質問事項は、大きく分けて、(1)筑波山への登山経験に関して、(2)筑波山周辺地域に存在する観光スポットに対する関心と体験・利用実態、(3)つくば市で開催される行事・イベントに対する関心と参加経験の3点である。次節以降では、これらの点に関して順次分析を行うことにしたい。

## 2. 筑波山への関心度と登山経験

本節では、筑波山への登山経験がある者に対して、a)最初に登った時期、b)これまでに登った回数について検討する。

### 2-1 筑波山への登山経験

表2は、筑波山に登った経験のある学生の推移をまとめたものである。以上のデータをもとに、有効回答者数に占める比率に関して、(1)2年生以上、(2)新入生、(3)留学生およびその他(放送大学)のグループに分け、その推移を図示すると図1～図3のようになる<sup>10</sup>。

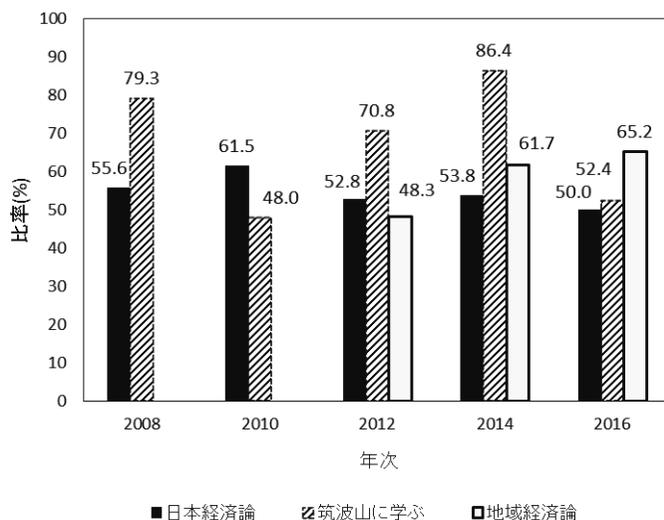
<sup>9</sup> なお本論文では、市民講座「筑波山から学ぶ」、大学院科目「グローバル経済と日本」での調査に関しては、前者は筑波山に登った経験のある者、後者は留学生にそれぞれ対象を限定して、その分析を試みることにしている。

表2 筑波山への登山経験・同比率の推移

年次		2008	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
2～4 年生 対象	日本経済論 比率(%)	20 55.6	24 61.5		19 52.8		21 53.8		14 50.0	
	日本経済史 比率(%)									
	地域経済論 比率(%)					14 48.3		29 61.7		15 65.2
	筑波山に学ぶ 比率(%)	23 79.3	12 48.0		17 70.8		57 86.4			33 52.4
1年生 対象	総合科目 比率(%)			54 56.6			45 57.0			
	フレセミ 比率(%)		8 18.2	10 22.4			15 34.9			6 30.0
	県立大学 比率(%)	30 34.5	14 40.0		26 36.1		7 31.8		12 32.4	18 36.7
大学院	大学院(留学生) 比率(%)								16 55.2	19 59.4
その他	放送大学 比率(%)						19 55.9	19 52.8	13 33.3	
	市民講座 比率(%)					65 —				

(注) 各科目の上段:実数(人)、下段:回答総数に占める比率(%)

図1 筑波山に登った比率 (2年生以上)



<sup>10</sup> 作図の都合上、図1の「地域経済論」2013～2017年は2012～2016年に、図2の「フレセミ」2011、2017年は2012、2016年に、それぞれ表記してある。また市民講座に関しては、登山経験者のみを対象としているため図3では除外した。

図2 筑波山に登った比率（1年生）

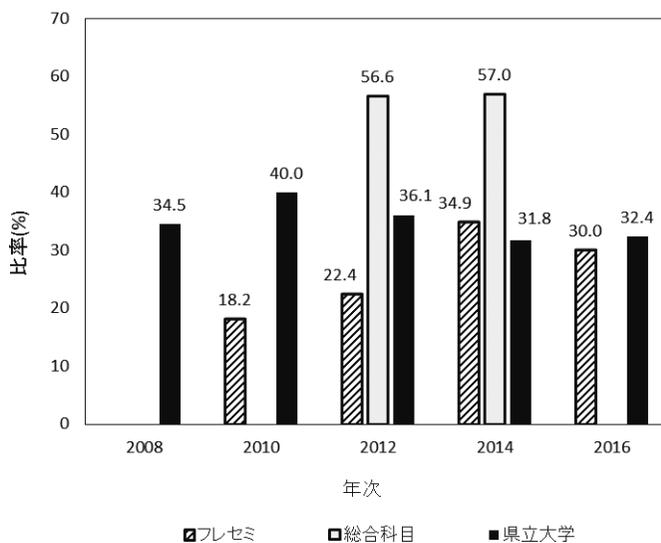
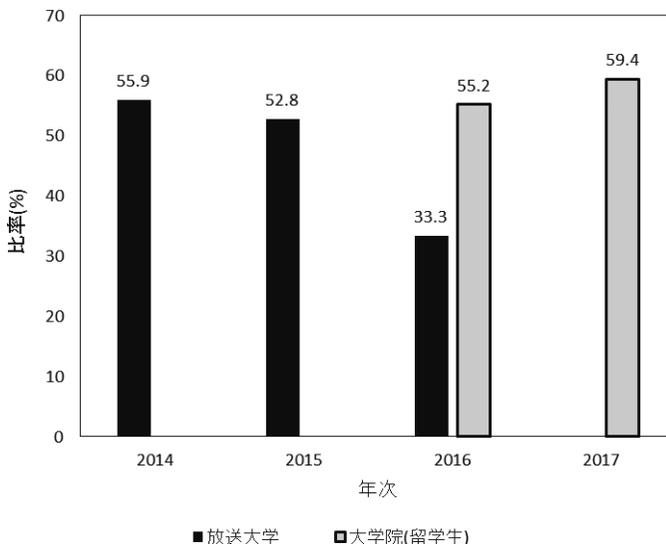


図3 筑波山に登った比率（留学生・その他）



それによれば、2年生以上の5～9割に登山経験があることがわかった。なかでも「筑波山に学ぶ」に関しては7～9割に達する年もあり、「日本経済論」および「地域経済論」と比べても高い。しかもこの水準は、図2～図3に示した他のグループの比率と比較しても高い点が注目される。

なお、「筑波山に学ぶ」2012年調査では、学生に対して、なぜこの科目を履修したのかについても調査した<sup>11</sup>。その回答のなかから、登山経験があると答えた学生を抜き出し、その受講理由を集計した。

それによれば、「筑波山および周辺地域について興味があったから」と「自分の専攻分野・研究に役立つと思ったから」と答えた学生が同数で最も多かった（17人中9人）。このうち、「自分の専攻分

<sup>11</sup> この質問事項は複数回答可とした。なお残念ながら、比率が86.4%と最も高かった「筑波山に学ぶ」2014年調査では、同様の質問事項を設定していない。

野・研究に役立つと思ったから」と答えた約7割の学生が国際総合学類の学生であり、彼らにとって<自分の専攻分野・研究>とは、地域開発あるいは街づくりに関連した分野をさすとみることができる。一方、以上の回答とは異なり、「この時間に他の授業が入ってなかったから」あるいは「大学卒業後、茨城県あるいはつくば周辺地域に就職したいと考えているから」と答えた学生は、それぞれ2人およびゼロであった。

以上のように、「筑波山に学ぶ」履修生の多くは、筑波山および周辺地域に普段から大きな関心を持っており、彼らの登山経験比率が高いのも、そうした関心の高さを反映しているとみることができよう。

一方、1年生に関しては、社会学類フレセミ受講生が2～3.5割、茨城県立医療大学生は3～4割の水準にある。これに対して総合科目受講生の場合は約6割に達しており、「日本経済論」や「地域経済論」とほぼ同水準にあることが明らかとなった。

このように同じ1年生でも差が生じた理由の1つとして、調査時期の違いが影響していると考えられる。具体的には、前2者の調査が入学当初に実施されるのに対して、後者は10月あるいは翌年2月であった（前掲表1）。

このことが比率の差になって現れているとすれば、1年生の場合、入学当初は多くの学生が筑波山に登った経験がなかったものの（フレセミ生等）、10月あるいは翌年2月までに登山経験者は順次増大してゆき、上述のように2年生以上と同様の水準に達している（総合科目生）と推察することができよう。

さらに放送大学生と留学生の結果に着目したい。このうち前者について、登山経験がある学生の年齢別および現居住地地域別の分布をみたのが表3～表4である。

表3 登山経験者の年代別分布（放送大学）

調査年次		20代	30代	40代	50代	60代以上
2014	実数	1	2	5	1	10
	比率(%)	5.3	10.5	26.3	5.3	52.6
2015	実数	4	0	2	1	12
	比率(%)	21.1	0.0	10.5	5.3	63.2
2016	実数	2	0	0	2	9
	比率(%)	15.4	0.0	0.0	15.4	69.2

表4 登山経験者の地域別分布（放送大学）

調査年次		茨城県	東京	埼玉	神奈川	千葉
2014	実数	3	6	2	1	7
	比率(%)	15.8	31.6	10.5	5.3	36.8
2015	実数	6	5	1	0	7
	比率(%)	31.6	26.3	5.3	0.0	36.8
2016	実数	3	5	3	0	2
	比率(%)	23.1	38.5	23.1	0.0	15.4

この表から、放送大受講生の場合、(1)筑波山に登った経験があるのは60代以上が圧倒的に多いこと、(2)その約7～8割が東京や千葉を中心とした茨城県以外の地域に住んでいることがわかる。

つまり、彼らにとって筑波山は、筑波大学や茨城県立医療大学の学生と比べ距離的に必ずしも近い存在とはいえない。それにもかかわらず、2014～2015年調査では、登山経験者の比率が、筑波大学生とはほぼ同じ水準であった。彼らの多くが、長い人生のどこかで、筑波山詣でを経験しているものと考えられる。

続いて留学生の動向に目を転じると、留学生の約6割が筑波山登山を経験していることが明らかとなった。その比率は「筑波山に学ぶ」受講生の水準には及ばないものの、「日本経済論」および「地

域経済論」を受講した学部学生と同じか、あるいはそれよりも高い年次もあることがわかる。筑波大学に来て国際日本研究を志す海外留学生が、身近な観光資源である筑波山に入学当初から高い関心を示していることがうかがえる結果となった。

## 2-2 平均登山回数

次に登山経験者に関して、(1) これまでに何回筑波山に登っているか（リピート度）と、(2) 最初に登った時期はいつかについてみることにしよう。まず(1)に関して、表5は、各年次、科目ごとに登山回数の平均値と中央値（MEDIAN）を算出したものである。

同表から明らかなように、平均回数に関しては全体的にみて1～3回（中央値で1～2回）にとどまっており、科目ごとにそれほど大きな違いは認められない結果となった。ただし、そのなかにあつて60代以上が多くを占めていた放送大学生に関しては、2.5～3.5と相対的に高いことが注目される。また市民講座受講生の平均値（33.2）の高さは数人の「登山マニア」の数値に影響された可能性が高いものの、中央値でみても10回とかなり高い結果が出た。

つまり、これらの受講生は、20代前後の学生に比べて、長い人生のなかで登山回数を重ねてきた「リピーター」であることが予想される。それと比較した場合、筑波大と茨城県医療大生のリピーター率は低いのではないかと考えられる。

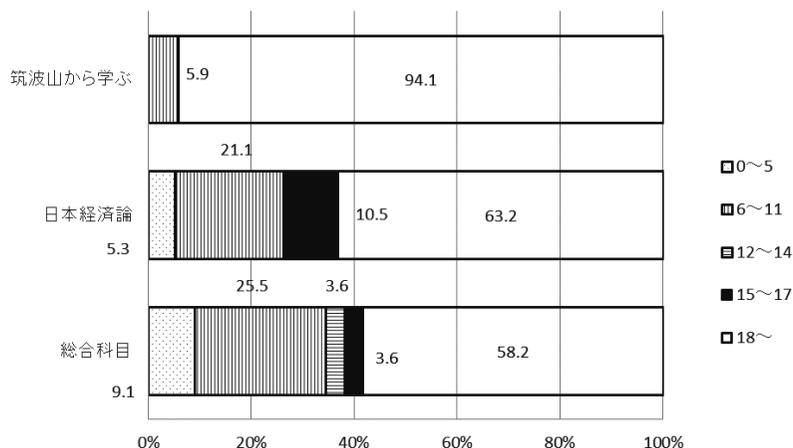
## 2-3 最初に筑波山に登った時期

続いて最初に登った時期について検討する。アンケート調査の分析にあたっては、各年次、科目ごとに得た回答を、それぞれ[1]小学校以前、[2]小学校、[3]中学校、[4]高校、[5]大学入学後（ただし放送大学と市民講座に関しては高校卒業以降とした）の5つに分類し、その分布状況を算出した。このうち2012年調査にもとづき、3科目の分布を示すと図4のようになる。

表5 平均登山回数(平均値と中央値)

年次		2008	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
2～4 年生 対象	日本経済論									
	平均値	2.2	2.3		2.3		1.8		2.3	
	中央値	2	2		2		1		2	
	地域経済論									
	平均値					2.1		1.9		2.1
	中央値					1		1		2
筑波山に学ぶ	平均値	2.3	3.4		2.0		2.6			2.8
	中央値	2	1.5		2		2			2
1年生 対象	総合科目									
	平均値			2.4						
	中央値			1						
	フレセミ									
	平均値		1.8	1.3			1.6			2.2
	中央値		1	1			1			2
県立大学	平均値	2.2	2.5	2.1			1.6		2.2	2.1
	中央値	1	2	1			1		2	2
大学院	大学院(留学生)									
	平均値								1.4	1.2
中央値								1	1	
その他	放送大学									
	平均値							2.5	3.5	
	中央値							2	5	
	市民講座									
平均値					33.2					
中央値					10					

図4 筑波山に最初に登った年齢  
(2012年調査 単位: %)



同図から、5つの時期のうち、小学校か大学入学後のどちらかの時期に最初に登ったと答えた学生が特に多いことがわかる。またこの点は、他の調査においてもほぼ同様の結果が得られた。そこで、この2つの時期に焦点をあて、各年次、科目ごとに、当該授業における登山者総数に占める比率と、それが上記5つの分類のなかで何番目に多かったか(ランク)についてまとめたのが表6と表7である。

表6 大学入学後(高校卒業後)に初めて登った学生の割合

		年次	2008	2010	2011	2012	2014	2016	2017
2~4年生対象	日本経済論		14	15		12	16	9	
	比率(%)		70.0	62.5		63.2	76.2	64.3	
	ランク		1	1		1	1	1	
	年次						2013	2015	2017
	地域経済論						10	22	5
	比率(%)						71.4	75.9	33.3
筑波山に学ぶ		20	8		16	46	22		
比率(%)		87.0	72.7		94.1	80.7	66.7		
総合科目				38		22			
比率(%)				61.3		48.9			
1年生対象	フレセミ		1	0		1		1	
比率(%)			14.3	0.0		6.7		16.7	
県立大学		1	0	0	3	0	0	0	
比率(%)		3.4	0.0	0.0	11.5	0.0	0.0	0.0	
大学院	大学院(留学生)						15	19	
比率(%)							100.0	100.0	
放送大学						10	8		
比率(%)						52.6	61.5		
その他	年次					2013			
市民講座						37			
比率(%)						56.9			

(注) 各科目の上段:該当者数(人)、中段:回答総数に占める割合、下段:5分類中の順位

表7 小学生の時に初めて登った学生の割合

		年次	2008	2010	2011	2012	2014	2016	2017
2～4年生対象	日本経済論		2	5		4	4	4	
	比率(%)		10.0	20.8		21.1	19.0	28.6	
	ランク		2	2		2	2	2	
	年次						2013	2015	2017
	地域経済論						2	6	6
	比率(%)						14.3	20.7	40.0
	ランク						2	2	1
	筑波山に学ぶ		3	2		1	8		4
	比率(%)		13.0	18.2		5.9	14.0		12.1
1年生対象	総合科目				15		13		
	比率(%)				24.2		28.9		
	ランク				2		2		
	フレセミ		4	5		6		2	
	比率(%)		57.1	50.0		40.0		33.3	
	ランク		1	1		1		1	
	県立大学	19	10	14	17	2	8	10	
	比率(%)	65.5	71.4	60.9	65.4	28.6	66.7	55.6	
	ランク	1	1	1	1	2	1	1	
大学院	大学院(留学生)							0	0
	比率(%)							0.0	0.0
	ランク							2	2
その他	放送大学					7	3		
	比率(%)					36.8	23.1		
	ランク					2	2		
	年次					2013			
	市民講座					16			
	比率(%)					24.6			
	ランク					2			

(注) 各科目の上段:該当者数(人)、中段:回答総数に占める割合、下段:5分類中の順位

これらの結果から、大きく分けて2つの実態が明らかとなった。

1つは、新入生のうち、フレセミと茨城県立医療大生に関するものである。彼らの場合、大学入学後に登った比率がきわめて低く、5つの時期のなかでみたランクも4～5位が多い。特に茨城県立医療大生に関しては、7年分の調査のうち5年がゼロであった。その一方で、小学校の時に登ったと答えた学生は、ほとんどの年次で最も高く、ランクも1であることがわかる。

これに対してそれ以外の科目では、大学入学後に初めて筑波山に登ったと答えた学生が最も多く、次に多いのが小学校の時であった<sup>12</sup>。この点は、上記科目の1年生とは異なり、総合科目受講生も同様であった。

以上の事実から、次の想定が可能であろう。すなわち筑波大の場合、(1)入学直後にもかかわらず登ったと答えた者は、その多くが小学校時代の経験であったこと、(2)しかし入学から半年あるいは10ヶ月が経過するなかで徐々に登山経験者が増大してゆき、(3)2年次以上になると大学入学後の経験者の比率が最も多くなるということである。

またこの特徴は、放送大学生、市民講座受講生にも共通している。つまり彼らの一部は小学校時代に学校行事などで筑波山登山を経験するものの、その多くが高校卒業後の長い人生のなかで、関東有数の観光スポットとして筑波山を訪れているとみることができる。

<sup>12</sup> 留学生に関しては全員が大学入学後に登っていることがわかる。

### 3. 登山未経験者に関する考察

以上、2節では、筑波山に登った経験のある学生についてみてきた。これに対して3節では、調査時点で筑波山に登ったことがないと答えた学生に焦点をあて、その理由と今後の意向について分析する。

#### 3-1 これまでに登らなかった理由

はじめに、これまで筑波山に登らずにきた理由に関してみてみよう。調査では、その理由を、[1] 筑波山に興味がないから、[2] 筑波山まで遠いから、[3] 筑波山に行くのに不便だから、[4] これまできっかけがなかったからの4つの選択肢に分けて尋ねた<sup>13</sup>。その結果をまとめると、表8および表9のようになる。

表8 これまで登らなかった理由（2014～2017年調査）

	理由	筑波山に興味	筑波山まで遠	行くのに不	きっかけがな	筑波山に興味	筑波山まで	行くのに不便	きっかけがな
		がないから	いから	便だから	かったから	がないから	遠いから	だから	かったから
2～4 年生 対象	日本経済論	2014年				2016年			
	実数	5	6	3	13	4	3	3	7
	比率(%)	27.8	33.3	16.7	72.2	28.6	21.4	21.4	50.0
	筑波山に学ぶ	2014年				2017年			
実数	1	1	0	8	8	4	3	21	
比率(%)	11.1	11.1	0.0	88.9	26.7	13.3	10.0	70.0	
1年 生 対象	総合科目	2014年							
	実数	8	6	3	26				
	比率(%)	23.5	17.6	8.8	76.5				
	フレセミ	2014年				2017年			
	実数	5	2	1	23	2	2	1	8
	比率(%)	17.9	7.1	3.6	82.1	14.3	14.3	7.1	57.1
県立大学	2014年				2016年				
実数	3	8	0	13	2	3	0	16	
比率(%)	20.0	53.3	0.0	86.7	8.0	12.0	0.0	64.0	
大学院	大学院(留学生)					2016年			
実数					1	6	0	8	
比率(%)					7.7	46.2	0.0	61.5	
その他	放送大学	2014年				2016年			
実数	4	2	0	10	2	6	0	15	
比率(%)	26.7	13.3	0.0	66.7	10.0	30.0	0.0	75.0	

(注) (1)理由の選択肢を4つに分けて調査した2014以降をピックアップした。

(2)選択にあたっては複数回答可とした。

表9 これまで登らなかった理由（留学生・2017年）

大学院	大学院(留学生)	2017年			
	理由	興味がないから	遠いから	不便だから	きっかけがな かった
	実数	1	3	1	11
比率(%)	7.7	23.1	7.7	84.6	

それによれば、[1]と回答した学生は3割以下にとどまった。また[2]と[3]に関しては、総じて[3]に比べて[2]の比率が高いことがわかる。

このように両者に差が生じた背景には、距離と不便さについての認識の相違も関係していると考えられる。すなわち、これまで実際に筑波山に登ったことがない学生にとって、自分がいる場所から筑

<sup>13</sup> この質問事項は、2014年以降の調査において設定されたものである。

波山まで遠いと感じるかどうかの判断は漠然とながらもつきやすい。

それと比べた場合、筑波山に行くのが実際に不便かどうかの判断はつきにくく、それが少ない結果につながったと考えられる<sup>14</sup>。一方、以上にあげた理由とは対照的に、ほとんどの科目において[4]が最も多く、約5～9割の比率を占めた。

以上の結果から、全体として「筑波山に興味がないから」はきわめて低く、「これまできっかけがなかったから」とする理由が主であったことがわかる。このことは、ゼミやサークルなどの合宿や、学生の琴線にふれるようなイベント・行事などが筑波山で開催されるといった何らかの機会や興味を与えられた場合に、大学生が筑波山登山に向かう可能性が大きいことを意味しており、地域経済において大きな潜在需要が存在することを示唆しているものと考えられることができる。

### 3-2 登山未経験者の今後の意向について

およそ以上のようにとらえることができる登山未経験の学生は、今後に関してどのような意向をもっているであろうか。3-2項ではこの点について検討することにした。まず表10は、今後機会があれば筑波山に登ってみたいと回答した学生について、科目および年次ごとにまとめたものである。

それによれば、茨城県立医療大生の比率は、平均でみて5割未満と最も低い。これに対して、それ以外の科目では、7割以上が「いずれ機会があれば登ってみたい」と考えていることがわかる。なかでも、筑波周辺地域に比較的高い関心・興味を持つとみられる「筑波山に学ぶ」や留学生の比率が高い点が注目される。

表10 今後における登山希望（登山未経験者）

対象	年次	2008	2010	2011	2012	2014	2016	2017	平均値
2～4年生	日本経済論 実数	9	10		14	15	9		70.6
	比率(%)	56.3	66.7		82.4	83.3	64.3		
	地域経済論 実数					2013	2015	2017	87.7
比率(%)					86.7	88.9	87.5		
1年生	筑波山に学ぶ 実数	6	13		7	9		28	98.7
	比率(%)	100.0	100.0		100.0	100.0		93.3	
	総合科目 実数			32		31			79.0
比率(%)			66.7		91.2				
1年生	フレセミ 実数		22	11		22		9	60.2
	比率(%)		61.1	36.7		78.6		64.3	
	県立大学 実数	22	10	9	27	9	13	16	49.2
比率(%)	41.5	47.6	33.3	58.7	60.0	52.0	51.6		
大学院	大学院(留学生) 実数						11	12	88.5
	比率(%)						84.6	92.3	
その他	放送大学 実数					10	15		72.8
比率(%)						66.7	78.9		

(注) (1)比率: 今後登山を希望する学生の登山未経験者総数に占める割合。

(2)平均値: 各年次における比率の単純平均。

<sup>14</sup> その傍証の1つとして、「日本経済論」受講生が「不便」と回答した比率が相対的に高いのは、彼らがこの点に関する実情を、新入生や留学生と比べてある程度知っているうえで、そのように判断しているものと推察できる。

なお以上は、これまで筑波山に登ったことがないと回答した学生に関する調査結果であった。これに対して2013～2014年調査では、登山経験があると答えた学生に関しても同様の調査を行った。そのうち再び登ってみたいと答えた学生についてまとめたのが表11である<sup>15</sup>。

表11 登山経験者の再登山希望

2～4 年生 対象	日本経済論 実数 比率(%)	2014 16 76.2
	地域経済論 実数 比率(%)	2013 13 92.9
	筑波山に学ぶ 実数 比率(%)	2014 55 96.5
1年生 対象	フレセミ 実数 比率(%)	2014 12 80.0
	県立大学 実数 比率(%)	2014 4 57.1
その 他	市民講座 実数 比率(%)	2013 60 93.8

比率:今後登山を希望する学  
(注) 生の登山経験者総数に占める  
割合。

そこからは、登山未経験者と同様の傾向を読み取ることができる。すなわち、茨城県立医療大生に関しては、同じ1年生である筑波大フレセミ受講生と比較しても著しく低い。これに対して、それ以外の科目では、7割以上が再登山の意向を持っていることがわかる。特に「筑波山に学ぶ」受講生に関しては、未経験者の結果と同様に高い結果となった。

ちなみに表11では、市民講座受講生に関するデータも掲載しており、受講生の再登山に対する関心の高さがわかる。これと比較した場合にも、「筑波山に学ぶ」受講生はほぼ同水準にあり、筑波山登山への高い関心がうかがえる。

以上をまとめると、日ごろ茨城県阿見町およびその周辺で生活する医療大生の再登山指向は弱く、筑波山へは1度登れば十分と考える傾向にあるのに対して、つくば市を拠点とする筑波大には1度登った後も再び登ってみたいと考える学生が少なからず存在することが明らかとなった。

なお、こうした再登山希望者は、地域経済の視点からみた場合、「地域内に存在するリピーター」として注目することができるが、筑波大生の場合、実際に複数回登っている学生が少ないことは先に指摘した。しかしそのことは今後も登る意思が低いことを意味していない。むしろ以上の結果は、筑波大にそのようなりピーターになりうる学生が一定程度潜在的に存在することを示唆しているといえよう。

#### 4. 筑波山周辺の観光資源に対する関心度と訪問の実態

以上、筑波山への登山経験と登山への関心度についてみてきた。それに続いて4節では、筑波山周辺に存在する観光スポットに着目し、大学生の体験・利用実態と今後の意向について検討することにしてしよう。

<sup>15</sup> 残念ながら今回取り上げた調査では、それ以外の年次に関して同様のデータを得ることはできなかった。その意味で情報の制約が大きいという限界を前提としての考察であることをお断わりしておきたい。

この点に関して、アンケートでは11の主要な観光スポット（筑波山神社、筑波山梅林、筑波山大御堂、蚕影神社、北条商店街、つくば道、北条大池、平沢官衙遺跡、小田城跡、宝篋[ほうきょう]山、つくばリンリンロード）を取り上げ、（1）実際に行ったことがあるか、（2）今後行ってみたいと思うかについて調査した。

ただし、先の表1で掲げた全調査の集計結果は膨大である。そこで本論文では、同一時期における比較可能なデータをより多く得ることができる2014年の結果を事例としてピックアップし、分析を進めることにする。なお、同年に調査を実施していない市民講座と「地域経済論」に関しては、それぞれ2013年、2015年の結果で代替した。

#### 4-1 筑波山周辺観光スポットへの見学・訪問の実態

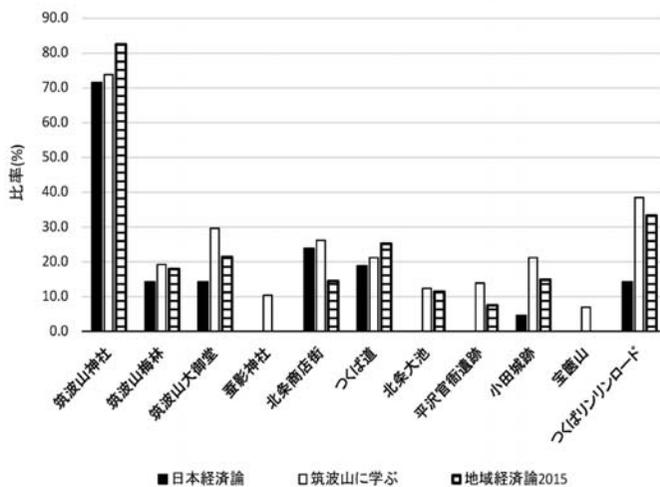
はじめに、各スポットに実際どれくらいの学生が訪れているかについてみることにしよう。特に4-1項では、筑波山に実際登った経験のある学生に焦点をあて、それらの学生がさらにどのような周辺スポットを訪れているかについて明らかにする<sup>16</sup>。

そこで、これまでと同様、調査対象を、（1）筑波大学2年生以上（「日本経済論」、「地域経済論」、「筑波山に学ぶ」）、（2）1年生（総合科目、フレッシュマン・セミナー、茨城県立医療大学）、（3）その他（放送大学、市民講座）のグループに分け、科目ごと、観光スポットごとに、筑波山登山の経験がある学生総数に対する比率を算出した。それを示すと図5～図7のようになる。

それによれば、全ての科目において最も訪問比率が高かったのが、筑波山神社であった。この神社は筑波山の麓に位置する一般的にもよく知られた観光スポットであり、登山の際にそれと合わせて訪れた学生が多かったと推察できる。

続いて、多くの科目において訪問比率が高かったのが、つくばリンリンロードであった。これは、1987年に筑波鉄道が廃線となり、その線路跡をサイクリング向けに再利用した道路である。この道は、茨城県立医療大のある阿見町に隣接する土浦市を始点とし、筑波大のあるつくば市を通り桜川市（岩瀬）までのコースとなっている。登山の折に利用したかどうかは別として、自転車で手軽に利用できることから、医療大の学生も含めて利用比率が高くなったとみることができる。

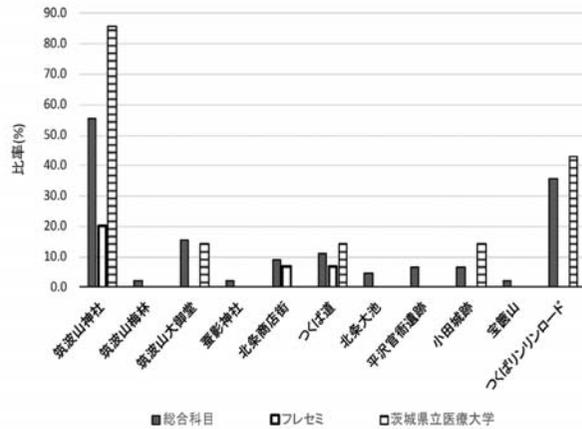
図5 行ったことがある筑波山周辺の観光スポット1



(注) 筑波山登山経験者に占める比率

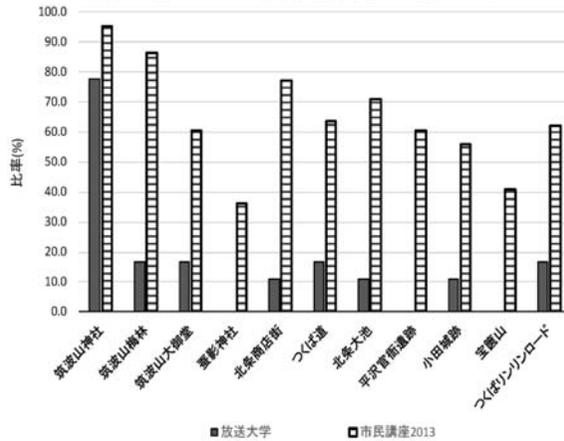
<sup>16</sup> これに対して、筑波山に登ったことはない学生が周辺スポットを訪ねたことがある場合も存在する。しかし本論文では、それが全体としてきわめて少ないのが実態であることのみを指摘するにとどめ、さらなる分析は他日を期すことにしたい。

図6 行ったことがある筑波山周辺の観光スポット2



(注) 筑波山登山経験者に占める比率

図7 行ったことがある筑波山周辺の観光スポット3



(注) 筑波山登山経験者に占める比率

これに対して、以上の2つのスポット以外に目をやれば、訪問比率が全般的に著しく低いことがわかる。この点、例えば筑波山の山腹に位置し、筑波山神社と同様に登山の過程で利用ないし訪問しうる可能性が高いつくば道や筑波山梅林でさえ、その比率が低い。

また、北条商店街に関しても、「筑波山に学ぶ」受講生の26.3%が最も高く、それ以外は訪問比率が低い状況にある。なお、同商店街は、筑波研究学園都市が建設される以前には筑波地域の中心商店街であった。しかしその後、徐々に衰退傾向に陥り、近年、筑波大学の学生・教員がつくば市、同商店街と連携して街づくりの再生に取り組んでいることで注目されている<sup>17</sup>。そうした取り組みが展開されているにもかかわらず、学生があまり訪れていない状況がうかがえる。

以上のように、一連の調査結果からは、筑波山に向かった学生達がおそらく登山のみを目的とし、それ以外の周辺スポットにはほとんど立ち寄っていない実態が明らかになった。

<sup>17</sup> 北条商店街も含めた街づくり再生に関しては、早川公（2015）がその取り組みを紹介している。

4-2 今後訪れてみたい筑波山周辺スポットについて

続いて4-2項では、学生が今後どのような周辺スポットに訪れてみたいと考えているかについて検討する。調査にあたっては、(1) これまでに当該スポットを訪れたことのある学生に関しては「再び訪れてみたいか」を、(2) まだ行ったことのない学生に対しては「今後行ってみたいか」を答えてもらった。そのうえで、今後訪れてみたいと答えた学生の各科目受講者総数に占める比率を求め、4-1項と同様に3つのグループに分けて示したのが図8～図10である。

その結果から、周辺スポットへの訪問に高い関心を寄せている2つのグループに着目することができる。1つは、フレセミ、茨城県立医療大学の学生である。前掲図6に明らかなように、これらの学生は、調査時点ではほとんどのスポットに行ったことがない学生達であった。

しかしながら、そのことは、彼らがこれらの観光スポットに関心がないことを意味するわけでは必ずしもない。図9から明らかなように、彼らの約3割ないしはそれ以上が、機会があればいずれ訪れてみたいと考えていることがわかる。

図8 今後行ってみたい筑波山周辺の観光スポット1

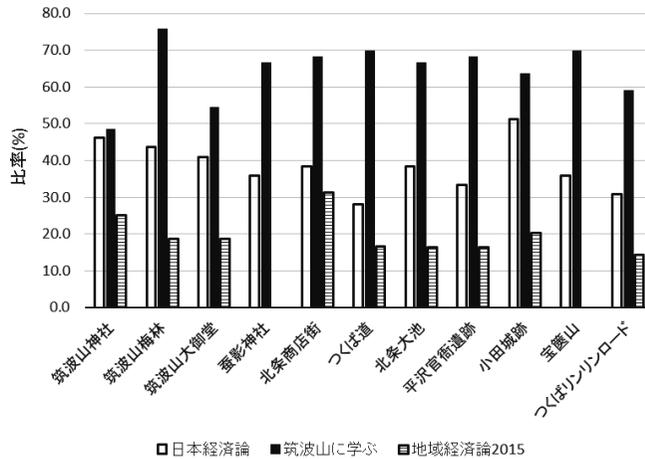


図9 今後行ってみたい筑波山周辺の観光スポット2

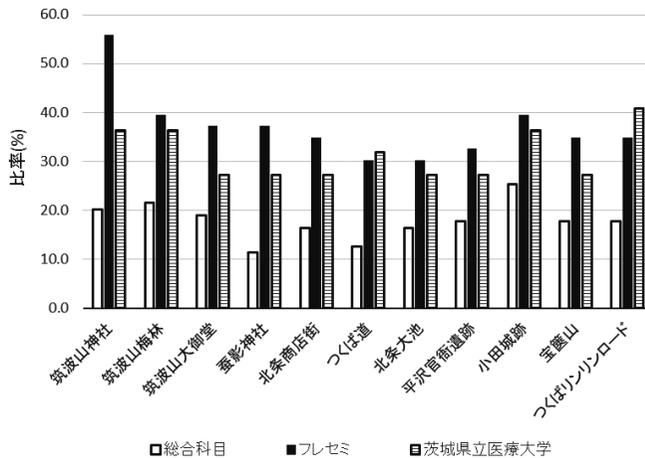
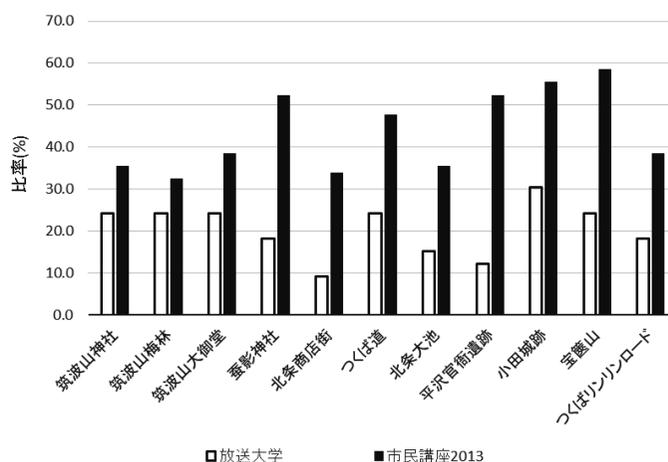


図10 今後行ってみたい筑波山周辺の観光スポット3



さらにもう1つは、「筑波山に学ぶ」および「日本経済論」の学生達である。特に「筑波山に学ぶ」受講生の関心の高さが注目される。なお彼らに関しては、筑波山神社への訪問比率が圧倒的に高いことを前項で指摘した。これに対して、今後に関しては、むしろ同神社以外への関心度が高いことがわかる(図8)。なかでも、筑波山腹にありながら、筑波山神社に比べ訪問数が著しく少なかった梅林とつくば道への関心度が逆に高い点も特徴といえる。

以上のように、筑波大および茨城県立医療大の場合、筑波山登山に比べ、その周辺スポットに実際に訪れている学生が少ないのが実態であった。しかし、そのことをもって彼らがこれらの観光資源に関心をもっていないと判断することはできないことも同時に明らかとなった。

むしろ彼らは、機会があれば筑波山以外のスポットにも立ち寄りたいと考えている。あるいは、これまで立ち寄ったことのないスポットにも積極的に行ってみたいと考えている様子が、調査結果からうかがえるのである。

## 5. 地域行事・イベントへの関心度と参加状況

続いて5節では、筑波山周辺で行われている行事・イベントに着目し、それらへの参加状況および関心度について検討することにしよう。

そのためにアンケート調査では、つくば市で定期的開催される10のイベント〔筑波山神社元旦祭り(1月開催)、筑波山梅まつり(2~3月)、北条大池桜まつり(4月)、つくばフェスティバル(5月)、筑波山ガマ祭(8月)、筑波山大御堂万灯祭(8月)、まつりつくば(8月)、つくば物語(10月)、筑波山もみじまつり(11月)、つくばマラソン(11月)]を取り上げ、(1)実際に見学あるいは参加したことがあるか、(2)今後、見学ないしは参加してみたいと思うかについて調べた<sup>18</sup>。なお前節と同様に、以下では2014年調査(市民講座と「地域経済論」に関しては2013年、2015年)の結果をもとに分析を進める。

<sup>18</sup> つくば市で開催される地域行事・イベントに関しては、平沢(2015)124-125頁を参照されたい。

5-1 地域行事・イベントへの参加状況

最初に、行事・イベントへの参加状況について検討する。そのため、これまでと同様に調査対象を3つのグループに分け、学生が実際に見学・参加したイベントについて、各科目の有効回答総数に対する比率を算出した。それを示すと図11～図13のようになる。

それによれば、新入生だけでなく、2年生以上に関しても、参加率が1割台あるいはそれ以下のイベントがほとんどであることがわかる。

このうち筑波山梅まつりは、筑波山梅林を中心に開催され、前述のように来訪者数も16～18万人を記録する一大イベントである。それにもかかわらず、筑波大生の見学・参加率はきわめて低い。なお、前節では筑波大生の筑波山梅林への訪問率の低さについて指摘したが、同所開催の梅まつりへの参加率も同様に低いことが明らかとなった。

以上のように全般的に参加率が低い状況のなかで、まつりつくば、つくばフェスティバル、つくばマラソンへの参加率に関しては、例外的に高いことが注目される。しかもこの特徴は、市民講座受講生の参加状況と比較した場合により明確となる。すなわち、図13が示すように、市民講座受講生は、大学生と比較して様々なイベントに幅広く参加していることがわかるが、そのなかで参加率がきわめて高いのは、筑波山神社元旦祭り、同梅まつり、北条大池桜まつりであった。

図11 実際に見学・参加したイベント1

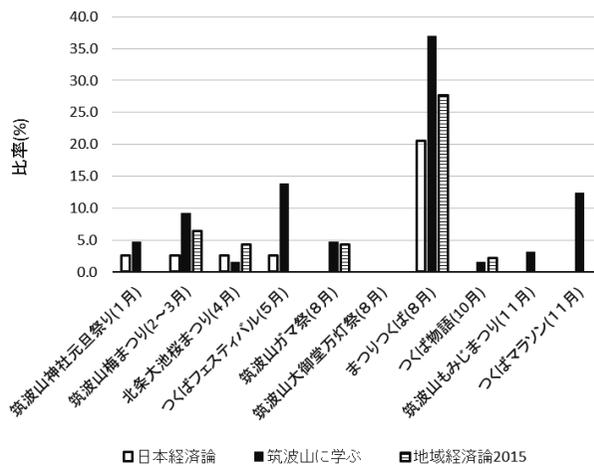


図12 実際に見学・参加したイベント2

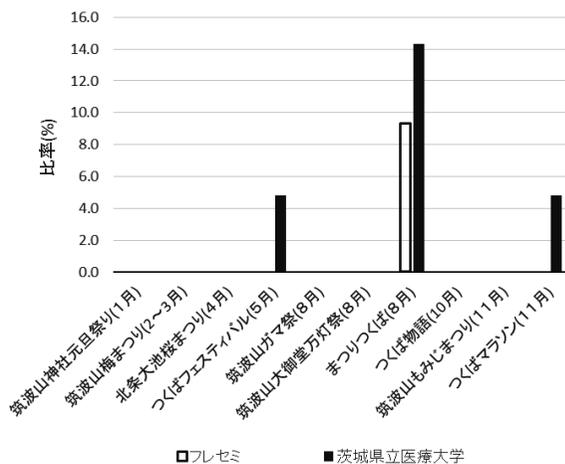
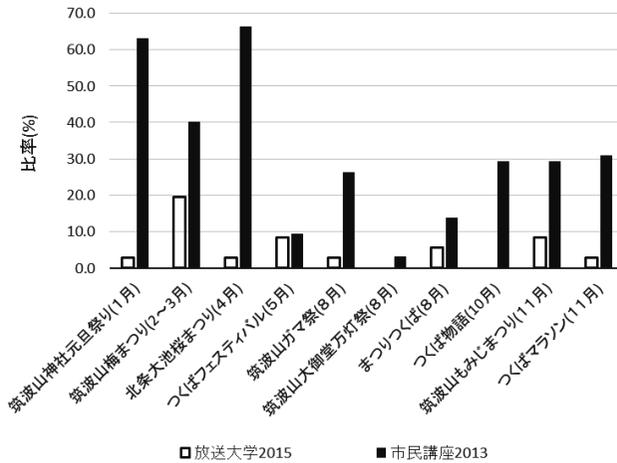


図13 実際に見学・参加したイベント3



これに対して筑波大や茨城県立医療大生の場合は、それらへの参加率は著しく低い。その他方で、市民講座受講生では低かった、まつりつくば、つくばフェスティバルへの参加率が逆に高い結果となっている。

ちなみに前者（筑波山神社元旦祭り等）が筑波山麓付近で行われる伝統行事であるのに対して、後者（まつりつくば等）は研究学園都市エリアで開催される比較的新しいイベントである。この相違に留意するならば、以上の結果は、筑波大生のイベント参加が、学園都市で開催されるものに著しく偏っていることがわかる。

### 5-2 地域行事・イベントへの関心度

続いて、上記の主要イベントに対して、今後見学・参加してみたいと考える学生がどの程度いるかについて検討することにしよう。本節5-1項と同様に、各科目の回答総数に対する比率を求め、図示すると図14~図16のようになる。

図14 今後見学・参加したいイベント1

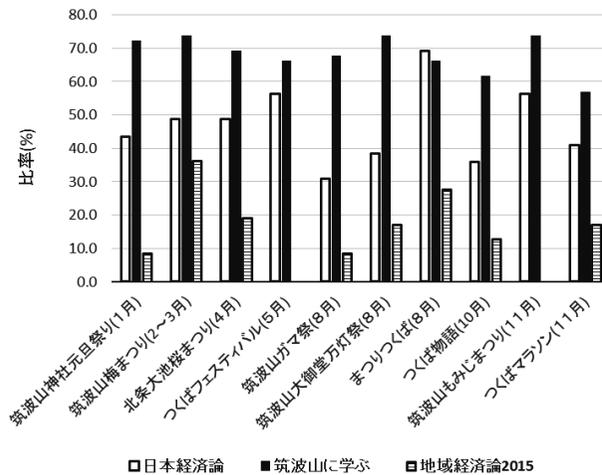


図15 今後見学・参加したいイベント2

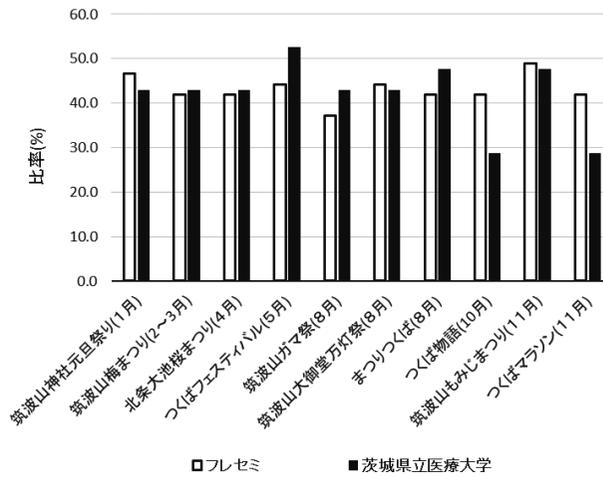
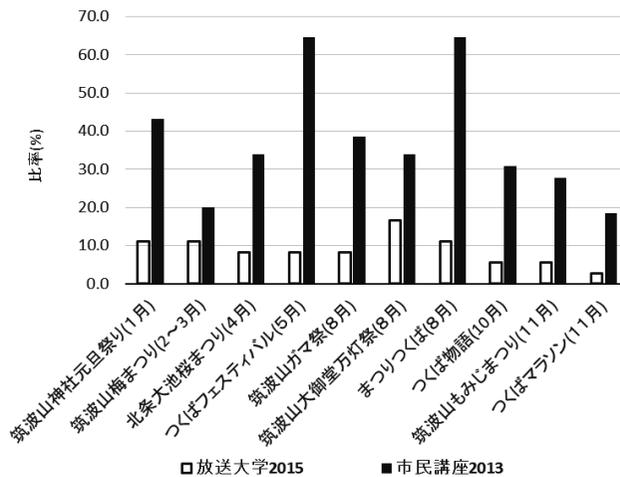


図16 今後見学・参加したいイベント3



ここで得られた調査結果と5-1項でみた学生の見学・参加実態とを対比した場合、以下の点に注目することができる。まず、筑波大（フレセミ）、茨城県立医療大の1年生であるが、彼らはほとんどのイベントに関して、見学・参加率がゼロであった（前掲図12）。これに対して、機会があれば見学あるいは参加してみたいと考える学生が約3～6割に達していることが明らかとなった。同様に、2年生以上に関しても、「筑波山を学ぶ」、「日本経済論」において参加希望比率が高いことがわかる。

さらにこれらの結果を市民講座のそれと比較した場合、以下のような特徴を指摘することができる。まず市民講座受講生では、実際に参加・見学した伝統的なイベント（筑波山梅まつり、北条大池桜まつり等）よりは、むしろ未体験のまつりつくば、つくばフェスティバルに関心が高い（図13、図16）。

これに対して、上記の大学生達は、学園都市のイベント（まつりつくば、つくばフェスティバル等）への参加だけでなく、筑波山麓付近で行われる伝統行事も含めた、ほぼ全てのイベントに関して高い見学・参加希望をもっていることである。こうした特徴が、他の調査年次に関しても妥当するかどうかは今後の検討課題である。

しかし以上の結果は、機会があれば大学の近くで開催されるイベントのみならず、伝統的な行事・イベントにも参加してみたいと考える筑波大および茨城県立医療大生がいることの一端を示すものではある。言い換えれば、こうした関心を有する学生の存在に着目してゆくことは、地域振興・活性化の観点からみて重要な意味をもつといえよう。

おわりに

本論文の冒頭で述べたように、つくば市を中心とした筑波山周辺地域には、高い集客力をもった観光資源が存在する。その場合、地域経済の持続的な振興・活性化のためには、「域外客」の取り込みのみならず「地域内にいる客」の存在にも積極的に目を向け、彼らに域内の資源に関心をもってもらい、それらに親しんでもらうことが重要な意味をもっている。

筑波山周辺地域の場合、そうした「域内客」の一大集団として、筑波大学や茨城県立医療大学生が存在しており、彼らの関心や域内経験に関する実態把握にも積極的に取り組んでゆく必要がある。本研究はその試みの1つといえるが、最後に、これまでの考察で得られた学生の実態について簡単にまとめると以下のようなになる。

第1に、筑波山登山に関しては、2年生以上の調査対象者の実に半数以上（約5～9割）が、筑波山に登った経験をもっていた。これを時間の経過とともにとらえると、入学の時点では登山経験者がきわめて少ないが、その後順次増大し、2年生以上になると大学入学後に登ったとする学生が最も多くなることが明らかとなった。

一方、登山未経験者に関しては、「これまで登る機会がなかった」ことをあげる学生が最も多く、2年生以上の7割以上、海外留学生の約9割が「いずれ機会があれば登ってみたい」と考えていることが注目される。さらに登山経験者のうち2年生以上のほとんどの学生が、リピーターとして再登山の意向をもっていることも断片的ながら明らかとなった。

第2として、筑波山周辺の観光スポットに関しては、筑波山神社などごく一部を除いて全般的に訪問比率が著しく低い結果が得られた。しかしながら、そのことはこれらのスポットに学生の関心が無いことを必ずしも意味しておらず、むしろ彼らは機会があれば筑波山以外のスポットにも立ち寄りたいたいと考えていること、あるいはこれまで立ち寄ったことのない観光スポットにも積極的に行ってみたいと考えていることが明らかとなった。

第3として、筑波山周辺で開催される行事・イベントに関しては、周辺スポットと同様に全般的に体験比率がきわめて低い状況にある。しかし、研究学園都市エリアで開催されるイベント（まつりつくば、つくばフェスティバル、つくばマラソン）に関しては、相対的に高い結果が得られた。そうした実情にかかわらず、今後の意向に関しては、上記学園都市のイベントへの参加だけでなく、筑波山麓付近で行われる伝統行事も含めた、ほぼ全てのイベントに関して高い見学・参加希望をもっていることが明らかとなった。

以上のように、これまでの調査結果からは、(1) 筑波山登山と比べて周辺スポットやイベントの体験・参加率の低さが浮き彫りになる一方で、(2) 今後に関しては登山と同様に周辺スポットやイベントへの参加に高い関心をもっていることも同時に明らかとなった。

この点を踏まえるならば、筑波山周辺地域の持続的な振興・活性化をはかるうえでは、両者のギャップをどう埋めるか——すなわち(1)を直視しつつ、(2)にみられる学生の潜在的な需要をどう実際の行動に向かわせるかという点も重要な課題となるといえよう。

## 参考文献

- 伊丹敬之（1998）「産業集積の意義と論理」（伊丹・橘川・松島 1998所収）。
- 伊丹敬之・橘川武郎・松島茂編（1998）『産業集積の本質』有斐閣。
- 茨城県商工労働観光部観光局観光物産課（2017）『観光客動態調査報告』2016年版。
- 橘川武郎（2005）「地域経済の活性化と雇用の創出」（橘川・連合総合生活開発研究所2009所収）。
- 橘川武郎（2009）「地域経済活性化と第3次産業の振興」（東京大学社会科学研究所・玄田・中村2009所収）。
- 橘川武郎・連合総合生活開発研究所編（2009）『地域からの経済再生』有斐閣。
- 高岡美佳（1998）「産業集積とマーケット」（伊丹・橘川・松島 1998所収）。
- 中小企業庁（2014）『中小企業白書』2014年版、第4部第3章。
- つくば市（2016）『統計つくば』2016年版。
- 東京大学社会科学研究所・玄田有史・中村尚史編（2009）『希望学2 希望の再生』東京大学出版会。
- 早川公（2015）「筑波山麓地域における〈まちづくり〉の展開」（前川2015所収）。
- 平沢照雄（2015）「筑波山および周辺の地域経済—歴史的な構造変化と経済発展—」（前川2015所収）。
- 前川啓治編（2015）『筑波山から学ぶ』筑波大学出版会。